

——周子先生は本当に神様になりたかったのだろうか？ この映画プロジェクトに参加したとき、私が最初に感じた疑問だ。それから長い時間をかけて取材し、映画化がかなった今でも、私はその答えを探している。

ところで、私にとつてのお医者さまは、神様だと云い切れる。2度ほど命を助けていただいたからだ。今でこそ、人より丈夫に見えかかるかもしれないが、私は本

先日、県臨床内科医会の講演会に呼んでいただいた。本物の「医者先生」たちの前でお話させていただきくなんて、とても光栄なことだ。演題は、「いしゃ先生は神様になりたかったのか」。昭和のはじめ、大井沢（現西川町）でへき地医療に尽力した女医・志田周子先生は、村の人たちから「いしや先生は神様だっけ」

当に体が弱かつた。中でも、急性腎炎で入院したときの経験は、私のその後の生き方に大きな影響を与えた。

1977（昭和52）年、私が5歳の時。ある日突然、真っ赤なおしつこが出て、訳も分からず入院になつた。どこも痛くないし、元気はあり余つてゐる。来春からは小学校に入学する

いしや先生

► 28

あべ 美佳



山形市立病院済生館の小児科に「ふきのとう学級」という院内学級ができたのは、78年の春。当時の記事を読み返してみると(インターネットがあるから)今は便利ですねえ)小学生合わせて14人の

ふきのとう学級は、東北大初めての院内学級だとか。開設までにどれほどのご苦労があつたのか……今私の私なら想像できる。いつだつて、先駆者は大変だもんの。そういえば、あの先生も女性医師だった。勝島先生……今でも思い出す、あの大好きなオーラ、笑顔、そして自信にあふれた声。勝島先生の声を聞くと、なぜか安心したのだ。せんせ、元気だべがなあ。

いうのに、尾花沢の実家から遠く離れた病院で過ごすことになってしまった。母はおなかに一番下の弟を宿していたので、祖母と父が世話をしてくれた。

当時、私はまあ、言うことをきかず、わがまま放題、暴れまくっていた。その頃の記憶は、トゲのように残っている。言い訳になるが、塩分のまったくない食事や、制限された行動、薬、の存在だった。

検査、薬……で、おかしくなつていたのだろう。もの例えじやなく本当に、山の中を走り回つて遊んでいた子供だったので、狭い病室に知らない人と一緒に閉じ込められることのストレスは、半端じやなかつたのだ。というより、事の深刻さが分かつていなかつた。た時間。それは院内学級

生徒が院内で勉強を開始……とある。その中で一番のチビが、そう、この私だつす。名木沢小の入学式に出られず、ふてくされていた私は、ふきのどう学級の入学校に参加することができた。皆より勉強が遅れたらどうしようか心配していたのに、戻つたら私の方が進んでいた。全部、先生方のおかげです、ありがとさまでした。

「人」^{ひと}の縁をつなぎ、園を返せるような映画にしなくて
ちゃ。完成するのは、本当に、もうすぐ！ 今は、エン
ドクレジットを作成中で、
資金してくださった方々、
全員の名前をお載せしよう
と頑張っているところだ。
人々、ステキなお知らせが
できるがも？？ 楽しみに
待つてでけうつしゃい。